第４章　巣山古墳発掘調査の概要

第１節　発掘調査の経過と成果

１．経過

巣山古墳は、墳丘を同一水面でとりまく周濠が灌漑用溜池として利用されているため、水位変動や風波によって墳丘裾・外堤裾が大きく侵食されている。墳丘西側の侵食崖面には、墳丘第一段テラスに樹立された埴輪が露出しており、確認できる個体数は約50基あった。墳丘東側では既に埴輪列が崩落した状態であり、早急な保存整備の必要に迫られた。

保存整備の基本方針は、墳丘第二段から上部の段築が良く残り、くびれ部、前方部の稜も良好に遺存するため現状で保存する。一方、墳丘第一段の斜面はほとんど削り取られているため、侵食された墳丘・外堤法面保護を目的に、築造当初の傾斜面に合わせてフトンカゴで遺構を覆う法面保護工法が選択された。整備に際しては、周濠の貯水量を確保しつつ水位を下げるため、周濠底に堆積した泥土の深さ約２ｍのうち１ｍを浚渫し、周濠に堆積する泥土に深く埋もれた墳丘と外堤基底部を確認する必要が生じ、平成12年(2000)度から発掘調査を行った。

２．成果

第１次調査で204mとされていた墳丘規模が全長約220mであることが判明した。第２次調査では前方部北西隅から木製鋤、周濠の北西隅に立てられた靫形木製品が出土した。第３・４次調査は泥土の浚渫工事中に発見された出島状遺構の調査を行った。第５次調査では喪船と考えられる準構造船部材が出土した。第６次調査では前方部前面の葺石基底石列が西から東へ傾斜し、東西で約１ｍの比高差が生じていた。これを解消するため墳丘主軸付近から西端には、基底石列の下に大型の石材を根石状に詰めていた。これは築造途中で出島状遺構を創出するため、西側周濠を再掘削した痕跡であることが判明した。周濠の再掘削は後円部東側付近、第17次調査でも確認した。

葺石は地山を掘削した後、基底石列を並べてから上方に区画石列を積み上げた後、石列間を葺石で充填する。列間距離は1.2～３m程である。一段目の葺石面の上に黒色粘土で二段目の基底石列を並べ、区画石列を設け、葺石を充填している。墳丘には二上山周辺の石材を使用するが、外堤葺石は第11次調査で御所市、第14次調査では天理市周辺の石材が持ち込まれていた。墳丘東側基底部には葺石が滑り落ちた後に、白色粘土で充填し葺石を葺き直した痕跡を第14・15次調査で確認している。

造り出しは前方部と後円部の接合部に方形に造形する。新木山古墳、島の山古墳が同様の位置に設ける。佐紀盾列古墳群、古市古墳群の前方後円墳が前方部に付設する造り出しの位置が異なる。(図4-1　巣山古墳遺構平面図、表4-1巣山古墳調査概要一覧参照)。

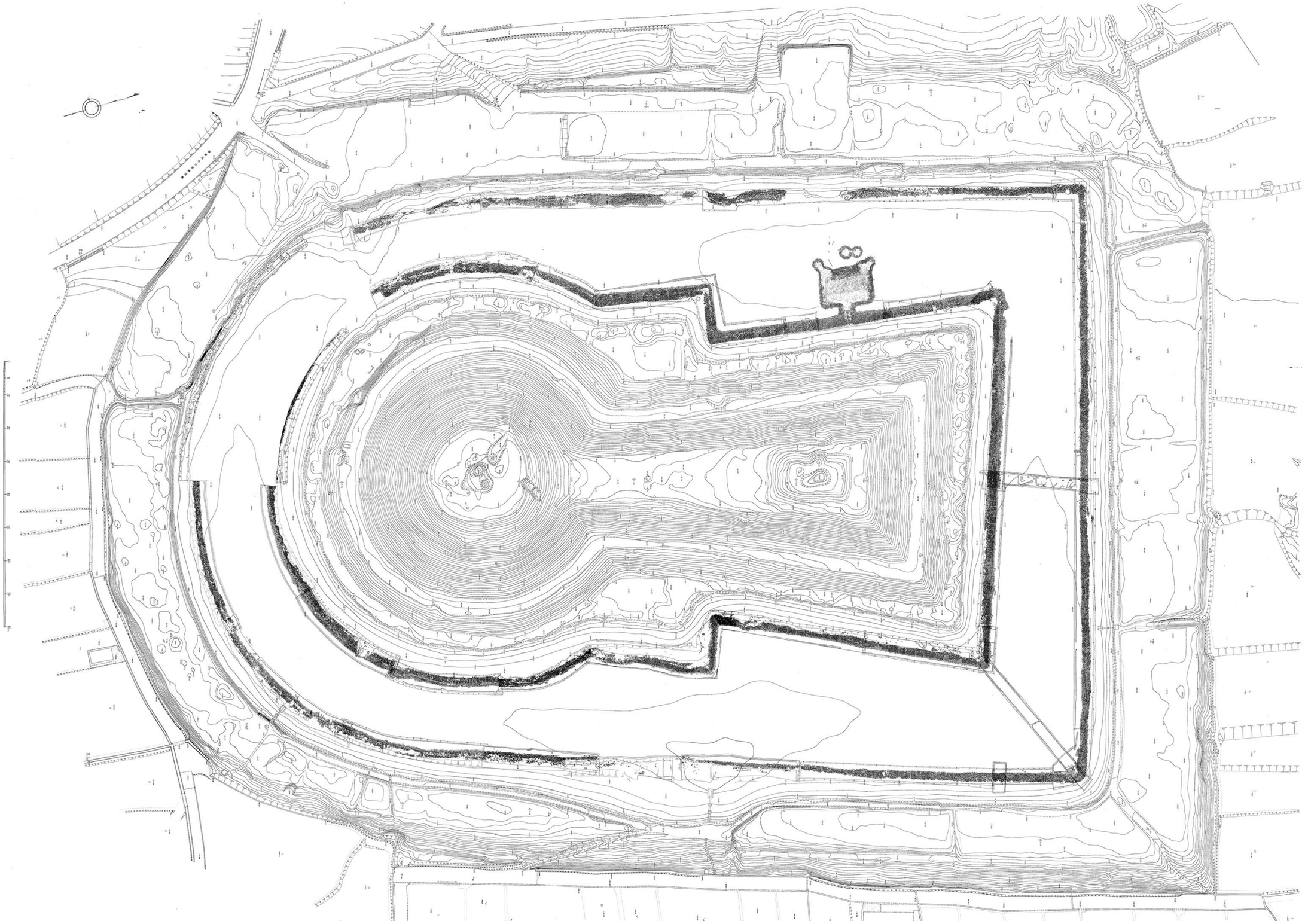

図4-1　発掘調査で検出された遺構分布図

表4-1　巣山古墳調査概要一覧

調査次数	調査期間	調査箇所	調査トレンチ	調査の成果	主な出土遺物	整備工事
1	2000(H12).12.12～ 2001(H13).3.29	墳丘裾、外堤裾	0101Ｔ ～0109Ｔ	墳丘全長が220m。泥土が周濠に厚さ2m堆積。	円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器	墳丘・外堤樹木伐採
2	2002(H14).1.21～ 2002.3.31	墳丘裾、外堤裾	0201Ｔ ～0205Ｔ	前方部西側隅と東側隅で約40ｃｍの高低差が存在する。周濠隅に靫形木製品。	壷形埴輪、靫形木製品、鋤、掘棒	仮設堤設置工事
3	2003(H15).2.21～ 2003.3.31	前方部西側 出島状遺構	0301Ｔ ～0304Ｔ	出島遺構の発見。外堤西側は地山を切り通し、外端に溝を設ける。	水鳥、家、蓋、盾、囲、柵形埴輪	周濠泥土浚渫工事 外堤樹木伐採工事
4	2003(H15).6.9～ 2003.12.9	前方部西側 出島状遺構	0401Ｔ	出島遺構の精査、出島の上は白石を敷き、埴輪を配置。	蓋形埴輪、木製品	周濠泥土浚渫工事 浚渫土処分
5	2004(H16).12.14～ 2005(H17).3.30	周濠部の 断ち割り調査	0501Ｔ ～0504Ｔ	周濠北東隅に準構造船の発見。	円筒、朝顔形埴輪、木製品	周濠泥土浚渫工事 浚渫土処分
6	2005(H17).11.14～ 2006(H18).1.24	前方部前面	0601Ｔ	西から東へ傾斜した周濠底を掘り直し、墳丘築造途中で出島遺構を造り出した。	円筒埴輪、木製品	墳丘護岸工事
7	2006(H18).11.13～ 2007(H19).1.30	前方部西側、 外堤部北東部	0701Ｔ ～0703Ｔ	出島状遺構の渡り土手は、２度目の計画変更で造られていることが判明。	円筒埴輪、木製品	墳丘護岸工事
8	2007(H19).11.19～ 2008(H20).2.1	北側外堤北東隅 から中央部	0801Ｔ	外堤葺石を検出。	盾形埴輪、木製品	外堤護岸工事
9	2008(H20).11.10～ 2009(H21).1.21	北側外堤中央部 から北西隅	0901Ｔ	外堤葺石を検出。	人形、卒塔婆	外堤護岸工事
10	2009(H21).11.9～ 2010(H22).1.25	西側外堤	1001Ｔ	外堤葺石を検出。	円筒埴輪、木製品	外堤護岸工事
11	2010(H22).10.22～ 2011(H23).2.4	前方部北東角	1101Ｔ	墳丘葺石を検出。	円筒埴輪、木製品	墳丘護岸工事
12	2011(H23).11.8～ 2012(H24).2.20	前方部西側造り 出し、前方部東 側、外堤東側	1201Ｔ ～1203Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	円筒埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
13	2012(H24).11.9～ 2013(H25).1.22	後円部西側、 外堤西側	1301Ｔ 1302Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	円筒埴輪	墳丘･外堤護岸工事
14	2013(H25).11.26～ 2014(H26).2.28	後円部西側、 外堤西側	1401Ｔ 1402Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	家形埴輪	墳丘･外堤護岸工事
15	2015(H27).1.13～ 2015.3.10	前方部東側造り 出し、外堤東側	1501Ｔ 1502Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	円筒埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
16	2015(H27).12.7～ 2016(H28).1.28	後円部東側、 外堤東側	1601Ｔ 1602Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	土垂、円筒埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
17	2016(H28).12.19～ 2017(H29).2.27	後円部東側、 外堤東側	1701Ｔ 1702Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
18	2018(H30).1.9～ 2018.2.24	後円部南東側、 外堤南東側	1801Ｔ 1802Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
19	2018(H30).12.10～ 2019(H31).2.22	後円部南東側、 外堤南東側	1901Ｔ 1902Ｔ	墳丘・外堤葺石を検出。	埴輪、木製品	墳丘･外堤護岸工事
20	2019(R1).12.16～ 2020(R2).1.22	後円部南側、 外堤南側	2001Ｔ 2002Ｔ	墳丘・外堤裾を検出。		墳丘･外堤護岸工事
21	2021(R3).1.18～ 2021.1.21	後円部西側	2101Ｔ	墳丘裾を検出。		墳丘護岸工事
22	2022(R4).2.2～ 2022.2.7	外堤西側	2201Ｔ	外堤裾を検出。		外堤護岸工事
23	2022(R4).11.28～ 2022.12.21 2023(R5).1.17～ 2023.1.20	後円部第一段盛 土、外堤余水吐		墳丘裾を検出。		外堤護岸、 余水吐工事
24	2023(R5).12.11～ 2023.12.26 2024(R6).2.5～ 2024.2.28	後円部、前方部 盗掘孔の調査	前方部 調査区 後円部 調査区	盗掘孔の調査。		盗掘孔埋め戻し

第２節　発掘調査の概要

１．前方部の調査

図4-2　0202トレンチと遺構図

0202トレンチ（前方部北西角）

基底石列は30㎝前後の石材を標高47.80ｍに配し、稜線上には30㎝前後の石材を８石積み重ねる。平面距離で150㎝残存し、傾斜角度は14°30′を計測する。前方部西側斜面の区画石列間は稜線石列から順に150、120、160、160、150㎝であり、傾斜角度は14°である。前方部前面の横石列は標高48.50ｍにあり、長径20㎝の石材で区画石列を作り拳大の石材を充填する。区画石列の列間距離は170㎝を計測する。傾斜角度は根石から横石列付近で14°、横石列から上方では17°30′となる。横石列の下には、長径30～40㎝の大型の石材を幅1.5～1.7ｍ程根石状に配している。

0205トレンチ（前方部北東角）

前方部前面の基底石列は標高47.55ｍ付近に長径30㎝前後の石材を横方向に配し、基底石を支持するための石列が外側に巡る。基底石の上に長径20㎝前後の石材で区画石列を積み上げる。角の石列から区画石列は５条あり、葺石上端の列間距離は角から76、120、150、175㎝、基底石列上の列間距離は角から225、120、150、175㎝を測る。前方部の北東角は、角の稜と北側の区画石列で鋭角に狭まれ、前方部正面からは直角三角形に納めている。区画石列間を埋める葺石は10～15㎝の拳大の石材を使用し、傾斜角度は26°であった。

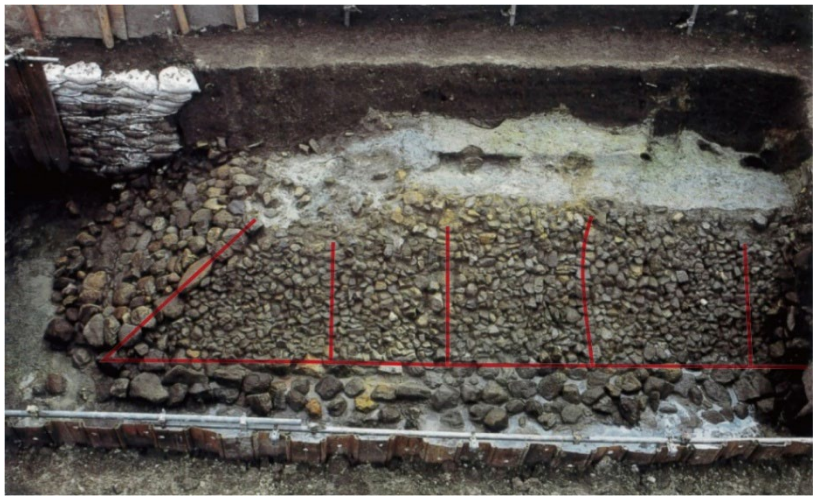

図4-3　0205トレンチ

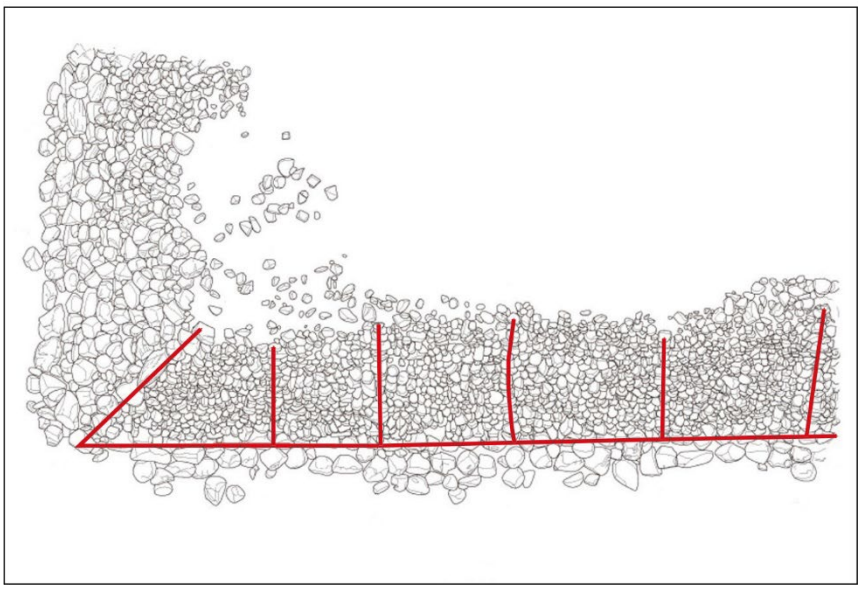

図4-4　0205遺構図

0601トレンチ（前方部前面）

前方部前面の葺石の様相は、東と西で大きく異なる。東端部では前方部前面の基底石列を標高47.55ｍ付近に長径30cm前後の石材を横方向に配し、基底石を支持する外護列石が外側に並ぶ。墳丘主軸付近では基底石が標高47.80ｍにあり、西端部では標高48.50ｍ付近まで上がり、正面観は、基底石列が西から東に傾斜し、東西で約１ｍの比高差が生じている。墳丘主軸から西端には、基底石列下に長径30～40cmの大型の石材を幅0.2～2.0ｍ程根石状に配している。根石基底付近の標高は47.80ｍで東端と西端で約25cmの比高差がある。

角の傾斜角度も前方部の東と西でそれぞれ異なる。前方部前面の葺石傾斜角度は北東隅が26°、中央部では24°、北西隅では17°30′と緩やかとなり、柘榴石黒雲母安山岩である拳大の石材を使った葺石面は捻れた形になり、墳丘主軸から西側で横石列が２条あることになる。また、この石材を多用する葺石面は傾斜角度が急である。

図4-5　0601トレンチ

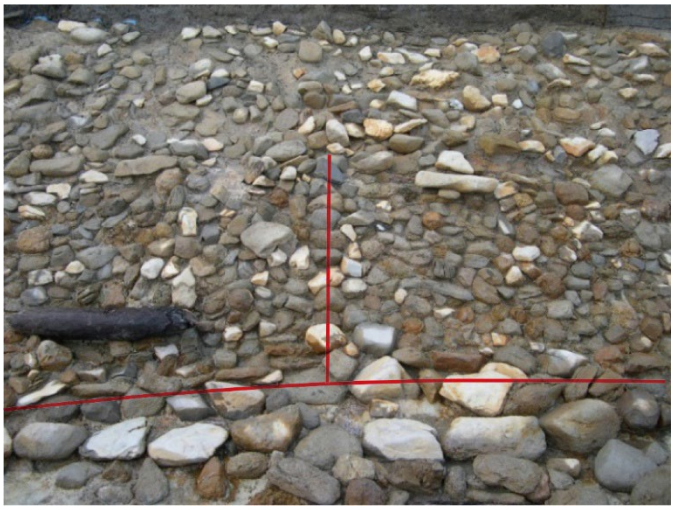

図4-6　0601トレンチ中央

図4-7　0601トレンチ西端

基底石列の上には葺石を施す作業単位である区画石列がある。長径20cm前後の石材を積み上げた石列を54条確認している。区画石列の列間距離は東端付近では270～320cmの最大区画を６条、最大区画に連続して198～225cmの大区画を10条、墳丘主軸付近では160～190cmの中区画を10条、主軸より西側では130～159cmの小区画を21条、100～129cmの最小区画を６条確認している。

葺石面の中位には黒色粘質土を裏込めとする二段目の横石列がある。ほぼ水平に設けられるため前方部東端では基底石列から約170cm、墳丘主軸付近では約130cmと狭くなり、墳丘主軸から西側で基底石列に擦りつけられて消滅する。

２．造り出しの調査

図4-8　1201トレンチ造り出し

1201トレンチ（西造り出し）

前方部と造り出しの接続部は直角に屈曲させ、造り出しの北西角も直角に曲げ、真っ直ぐに後円部に繋げる。平面形は長方形となる。

前方部と造り出しで形成される谷筋には区画石列を通している。この区画石列を基点とする区画石列が前方部側と造り出し側にそれぞれ２条立ち上がる。

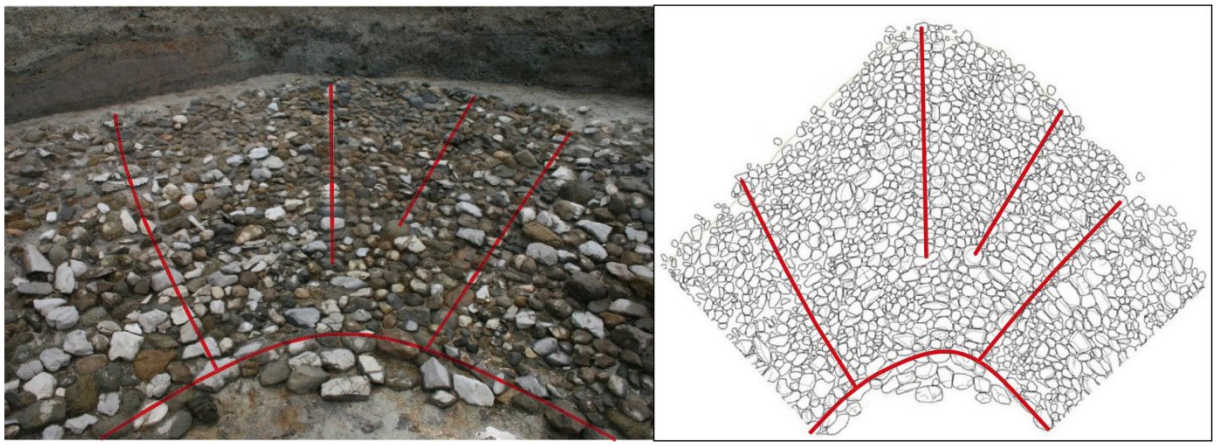

図4-9　1201トレンチ西くびれ部と遺構図

谷筋の区画石列の基底部付近から造り出しに立ち上がる区画石列は前方部基底石の延長線上に設ける。同様に、前方部に立ち上がる区画石列は造り出し基底石の延長線上にある。

後円部接続の手前で大型石材によりＶ字形の区画石列を作り、内部に大型石材と小振りな石材を交互に積む。このためＶ字形の区画石列内部に大型石材で作られる横の区画石列が２条認められる。トレンチ南端では区画石列を斜めに通して後円部へ接続する。

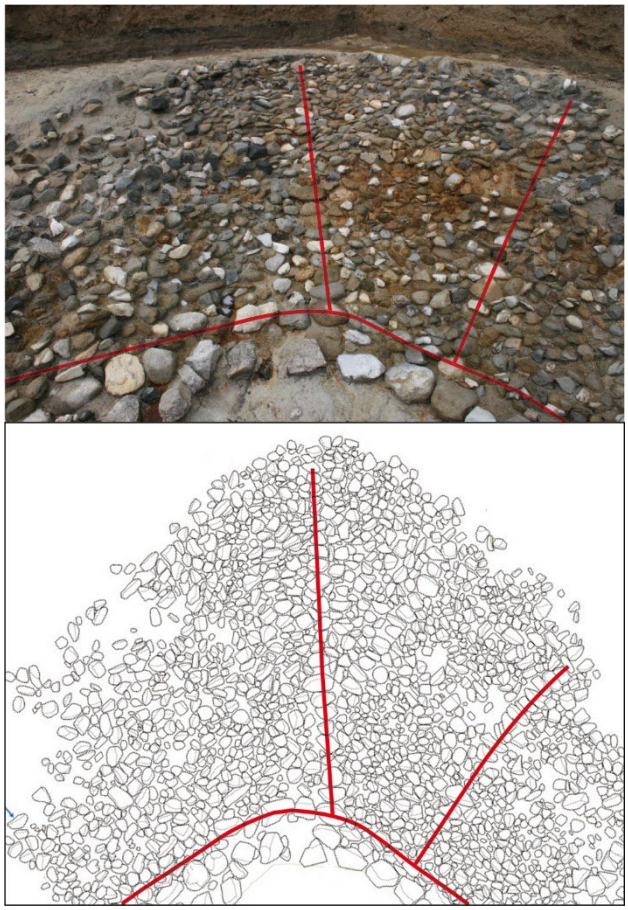

図4-10　1203トレンチ東くびれ部と遺構図

1203トレンチ（東造り出し）

東側造り出しの標高は、前方部との接続部付近が約47.60m、北東角が約47.20mを測る。基底石は30～40cmの石材を配して区画石列は20cm前後の石材を使用し、北東角から前方部接続部までに４条確認している。後円部接続部標高が約47.50mで、北東角に向かって緩やかに傾斜している。南側1/3は円弧状にすべり崩壊した部位が認められた。

３．後円部の調査

1401トレンチ（後円部西側）

後円部西側では基底石を標高48.00m付近に大型石材を置く。基底石から長径20cm前後の石材を小口積みにした区画石列を６条確認している。最小区画と小区画、最大区画となる。石材は輝石安山岩と石榴石黒雲母安山岩が多用され、前方部や造り出しに比べ、小振りで疎らである。

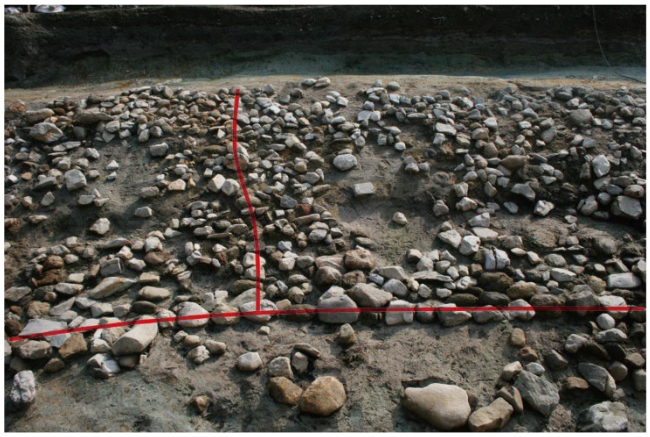

図4-11　1401トレンチ

1701トレンチ（後円部東側）

墳丘裾部の標高は調査区北端で47.20m、南端で47.10mを測る。

後円部の中位から上部の基底石・区画石列・葺石は施工精度が高く、中位以下葺石との違いなどが顕著で、施工時期に差がある

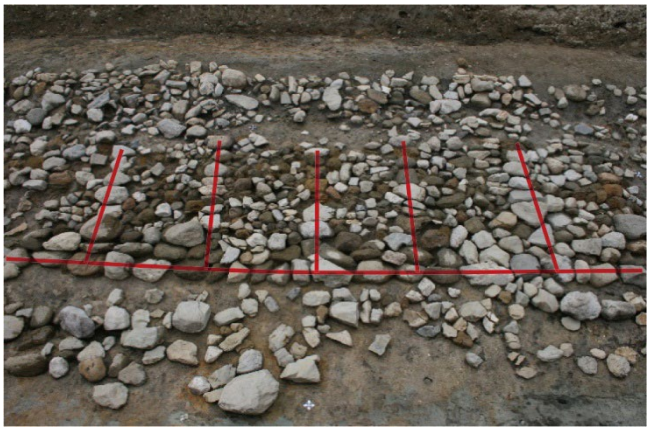

図4-12　1701トレンチ

図4-13　1801トレンチ

図4-14　0203トレンチ

図4-15　0901トレンチ

と考えられる。中位以下の葺石が基底石の上に重なる部分があることから、葺石施工後、周濠を掘り下げて墳丘斜面を形成し、根石状に葺石を追加したと考えられる。

1801トレンチ（後円部南側）

基底石は短い直線単位を繋いで並べ、後円部の弧を形成すると考えられる。短い直線単位は墳丘に向かって右側の石列上に左側の石列を少し重複させながら施工している。短い直線単位の始まり付近は20cm前後の小型石材を縦位に置く部分がある。基底石から縦方向に並べられた区画石列は数条検出したが、葺石の大きさと差がない石材が使用されている。

４．外堤部の調査

0203トレンチ

外堤部北西隅の葺石は標高48.20～49.10m付近に残る。隅の基底付近に30cm程の大型石材を配し、中央部に大振りの石材を使用する石列が残る。傾斜角度は14°を計る。コウヤマキの棒材とヒノキの奴凧形の靫を模したと考えられる木製品が出土している。一部腐朽するが、ほぼ全体が残存する。

靫形木製品は全長160cm、最大幅55cm、厚さは２cm程で、幅２cm、長さ16cmの長方形の穿孔が６列、６段施されている。靫形木製品は、外堤隅に結界を張る施設と予想される。

0901トレンチ

外堤葺石には基底石・区画石列が認められたが、墳丘に比べ雑である。葺石基底ラインも直線ではなく、波を打っていた。転落している葺石量は墳丘の５割程度で

あることから、外堤斜面全体に葺石を施すのではなく、斜面の中程までの可能性が高い。

丸みを帯びた長径30cm前後の含石榴石黒雲母安山岩を標高47.50m付近に基底石として配し、長径20cm前後の石材を小口積みにして区画石列を設ける。

基底石がある箇所では、区画石列上端に二段目の横石列を接続させている。二段目の石列は一段目の葺石を葺いた上に粘性の強い黒色粘土を裏込めとして積み上げる。

二段目の葺石材には輝石安山岩が多用される傾向がある。転落した葺石に混じって出土する遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器片が多数を占める。この時期に葺石を崩して幅約60cmの突堤が作られている。円筒埴輪片は少ないが、葺石上から盾形埴輪片が出土している。

５．周濠の調査

周濠は、丘陵を大きく掘り込んでいるため、地下水が大量に湧き出すが、周濠の最も低い地点にある出島状遺構の州浜部分や北側裾部分で樹木の根や根による撹乱跡が認められることから、築造当初から周濠に満々と水が溜まる景観は想定できない。出島状遺構の南西突出部は、周濠底から50cm程の高さで、水鳥形埴輪を置いたことから、当初の周濠水位は極めて低く出島状遺構の州浜を洗う程度と考えられ、常時、湧き出す水を地形的に低い周濠東側で排水していたと推定される。

植生環境が整うと草木の生育が始まり、葉や枝が周濠底に堆積し、水分を多量に含む有機質土に植物が生育して冬季に枝葉が落ちて周濠底に堆積する。これを繰り返して有機質土の堆積が進み、古墳時代後期には排水機能は失われていたと思われる。さらに有機質土の堆積が進み、周濠水位が上昇する奈良時代末～平安時代初頭には、この水を利用して墳丘裾、外堤裾に小区画水田を営むようになる。標高49.00m付近から上部の葺石を削り取り、周濠側に落し込む状況や墳丘の地山を削り出して造られた畦畔が0108・0109・0304トレンチで確認されている。さらに歳月を重ね、樹木の葉や枝が周濠底に堆積し、水位を押し上げると小区画水田を放棄し、周濠全体をため池として利用する現景観に近づくと考えられる。

図4-16　前方部調査区 竪穴式石室

図4-17　後円部中央調査区　竪穴式石室

図4-18　後円部東側調査区 竪穴式石室

６．埋葬施設の調査

前方部調査区

調査区の東西南北壁面はほぼ盗掘孔の埋土で、南東角に竪穴式石室の壁面が僅かに残る。調査区南東部には墳丘盛土を掘り窪めて粘土棺床を設けている。東西幅約１ｍ、南北長1.8m以上を測る。床面は半楕円形で、その上に明黄褐色粘土・にぶい黄橙色粘土を敷いて棺床としている。北端で石材が集石した土坑を検出した。

後円部中央調査区

盗掘孔埋土内から竪穴式石室の天井石１を検出し、現地表下約１ｍ、標高約65.1mで天井石２、現地表下約1.2m、標高約64.9m付近で天井石３を検出した。盗掘孔埋土内から検出した天井石１は長さ約１ｍ、幅約0.61m、厚さ約0.22mを測る。短辺の一方が円くなって一部欠損しており、元は長方形だったと考えられる。天井石２は長さ約1.9ｍ、幅約0.97m、厚さ0.22m弱を測る。天井石３は、長さ1.45m以上、厚さ0.22m前後を測る。

後円部東側調査区

地表下約１ｍ、標高約65.1m付近で竪穴式石室の天井石を２個検出した。

天井石４は長さ1.2m以上、幅0.3m以上、厚さ0.2m前後を測る。上面は北側に大きく傾く。天井石５は長さ1.7m以上を測る。上面は北側に大きく傾く。

第３節　新たな評価価値

１．出島状遺構

（１）出島状遺構の概要

前方部の西側ほぼ中央部で墳丘から周濠へ張り出す出島状遺構は高さ約1.5m程で、二段で築かれ，葺石を施している。基底部で南北約16m、東西約12m、上端で南北約11.5m、東西約7mを計測する。島の東側は方形で、東辺から南辺及び北辺へは直角に曲がり、西方向に延びる。

東辺では葺石を幅約1.3m検出し、傾斜角度は22～25°で葺く。南東隅には幅60×40cmの平板な石を立てる。南辺は板石を法面に貼り付けるように使用し、二段で築成する。葺石幅は1.0m弱で傾斜角度は約25～30°程ある。北東隅にも40×40cmの平板な石材が倒れた状態で出土している。

図4-19　墳丘と出島状遺構

図4-20　出島状遺構

図4-21　出島状遺構

図4-22　出島状遺構埴輪出土状況

北辺も二段で築成され、長径20cm以下の小振りな石材を多用した葺石面を幅約1.5～1.7m検出している。傾斜角度は13～18°である。

突出部　南辺から南西方向、北辺から北西方向に突出部を設けるが、その形状は大きく異なる。南西突出部は出島本体から半島状に飛び出し、先端には立石を置く。南辺からの石積みは一端くびれ、州浜から伸びる石積みにも絞り込みがある。幅約３ｍ，長さは約４ｍある。この周囲から水鳥形埴輪の胴、尾、頭部が集中して出土する。

北西突出部は出島から尖り出す形状で基部幅約３ｍ、先端部幅約２ｍ、長さ約３ｍを測る。先端に幅30cm、長さ60cm程の大型石材を立てたとみられる。

州浜部　西辺の石敷きは幅約2.6m、傾斜角度10～13°、長さ約８ｍを測り、州浜状に拳大の割石を敷き、他の辺より傾斜角度を緩やかにする。州浜状の石敷きの上は大型の輝石安山岩を使用した急斜面があり、約30°で立ち上がる。

渡り土手　出島状遺構の東には墳丘へと連絡する渡り土手があり、墳丘第一段テラスより約２ｍ程低い位置から上面幅約２ｍ、基底部幅約５ｍ、長さ約５ｍ程が残っている。渡り土手斜面には、葺石が幅約1.5m残り、傾斜角度は21°である。渡り土手の北側法面は出島状遺構の東辺から連続して葺石が葺かれ，前方部の墳丘葺石とは区画石列を設け区別する。

連接円形石組み　州浜部石敷きの中央から西よりに、連接する円形石組みは築かれる。大型円形石積みは直径約４ｍ、小型は３ｍを計測する。地山を整形して長径20～30cmの輝石安山岩を２～３段積み上げる。白礫を敷き詰めていた可能性がある。石組みの西側から蓋形埴輪２が出土している。

（２）出島状遺構の埴輪

出島状遺構に配置された形象埴輪の原位置は不明であるが，蓋形７・家形７・盾形３・水鳥形３・囲形４・柵形10点以上が出土している。

図4-23　蓋形埴輪１

蓋形埴輪

蓋形埴輪１は直径が60cm、肋木を含めた差し渡しが95cmを測る。軸受けまでの高さは60cmに復元される。軸受けから四方に飛び出す肋木までは薄い粘土帯で受骨を表現し、その上に軸受けと肋木から向き合う突起状の鰭を付ける。笠の中位には廻骨を表現する線刻が２条巡る。鰭部分は佐紀陵山古墳の蓋形埴輪と似ているが、布張りの状況を模した笠下半部の二段に方形板を上下左右に重ねたような面違い状の表現はない。

家形埴輪

家形埴輪は切妻・入母屋・高床があり、中心建物と考えられる入母屋の棟には網代表現がある。

図4-24　家形埴輪3

家形埴輪３は高さ79cm、破風板の差し渡し72cm，基底部は平で50cm、妻で42cmを計測する。最大の入母屋造りの家である。上屋根の高さは23cmと大きく造り、網代表現を施す。四面開放で、妻側に入り口を示す二段の抉り込みを設ける。裾廻り突帯の下には、平で２カ所、妻に１カ所の半円形の切り込みがあり、裾廻り突帯を受けるブリッジが四隅と平に１カ所ある。

盾形埴輪

盾形埴輪は高さ96cm、底径30cm、口径52cmの７段突帯の大型円筒埴輪の側面に盾面を貼り付ける。盾面は高さ57cm、幅45cmを計測する。円筒の側面を利用し、それを挟むように縦長の粘土板を左右対称に貼り付けるため、面は緩く湾曲した形状をなす。木製の盾を模倣したと推測される。

図4-25　盾形埴輪

水鳥形埴輪

水鳥形埴輪は復元高さ60cmで島状遺構の南西突出部付近に置かれたと考えられ、頭部がまとまって出土し、周辺に胴、尾の破片が集中していた。平たい嘴をもつ雁鴨類（コハクチョウ）[1]を模したと考えられる。津堂城山古墳の水鳥形埴輪に比べて小振りで、水掻きがない。

水鳥１の頭部は最も大きく造られ、水鳥２の頭部から頸には赤色顔料の塗布された痕がある。水鳥３は最も小さく目鼻の表現がない。目は竹管状の工具で形作られ、鼻は三角形に穿孔する。器台部に半円形のスカシを設け、肛門に円形の穴を開ける。

図4-26　水鳥形埴輪1・2・3

囲形埴輪

囲形埴輪１は65×63cmの規模で、高さが24cmある。壁に平面が鉤形で入口を表現する鉤の手を右に置き、上端部に山形突起を設け、扉左右には方立、上部には水平材、扉下の内外の仕切には蹴放の表現がある。囲形埴輪は出島の上面に配し、内部に小型の切妻家を置いたと考えられるが、導水施設を表現する土製品は見つかっていない。

図4-27　囲形埴輪1

柵形埴輪

柵形埴輪は高さ33cm、短径16cm、長径30cmと42cmのものがある。側面に２条の突帯を貼り付け、方形又は円形のスカシをあける。出島状遺構の西側頂上部から転落した状況で検出された。柵形埴輪も、祭祀場を囲む埴輪と考えられる。

図4-28　柵形埴輪1

図4-29　柵形埴輪2

（３）出島状遺構の性格

出島の上面には聖域を強調する石英の白石が敷き詰められ、祭儀場を区画する柵形埴輪で結界を張り、盾形埴輪でさらに聖域を明示し悪霊へ恫喝、慰撫をする。二重・三重に張られた結界の中には、様々な四面開放の家形埴輪が配置され、それらを取り囲むように蓋形埴輪が置かれ、囲形埴輪が備えられていたと考えられる。囲形埴輪の内部には、小型の切妻家形埴輪が収納され、導水の祭りを表現したと考えられる。この導水祭祀の遺構が葛城山西麓の南郷大東遺跡[(2)]で発掘されている。川の流れを堰き止め、貯水池をつくり木樋で水を引き、覆屋と垣で囲われた木槽に導く。沈殿と濾過をへた「浄水」を用いた古墳時代中期の首長の祭り場である。この祭りの場である覆屋と垣を出島状遺構の上面で、小型の家形埴輪と囲形埴輪で表現したと考えられている[(3)]。

水鳥形埴輪は水に浮かぶ有様を意図して、岬状の突出部に置かれたと考えられる。水鳥が霊魂・霊力と深く係わることは『古事記』『日本書紀』にも多く記され、ヤマトタケルが白鳥に化したという伝承などから魂の象徴とされる。遠い海のかなたの「常世」から霊魂を運んでくるのが水鳥であり、南西突出部の水鳥形埴輪は常世の水辺の情景と解釈される(4)。常世の様子は『日本書紀』の垂仁紀に田島間守が天朝命を受け、香菓を取りに行く記事があり、万里浪を越え、はるかな弱水をわたり、たどり着く神仙世界が描写されている。『丹波国風土記逸文』では、水江浦嶋子が舟に乗り「蓬山」に至る。北方の遠い海の中の大きな島と捉えられ、浪が寄せる浜辺が想定される。常世は、海の彼方にあると考えられた島で、永遠の神仙世界である。

巣山古墳の出島は、亡き王が住むこの神仙世界を再現したと考えられる。西側外堤から湧き出る地下水は、周濠を満たす常世の海の象徴であり、そこに浮かぶ出島は常世の島で州浜の小さな石に濠の水が寄せ、常世の浜が連想される。波除けかとも思われる連接円形石組みは、州浜の中央より西に相対する位置にあり、岬状に張り出す南西突出部と連接円形石積みは大きく空いている。常世の入江を表現しているのかもしれない。

周濠内に島を設け、水鳥形埴輪を配する点は藤井寺市津堂城山古墳に酷似する。津堂城山古墳の島状遺構もほぼ同規模、二段で築成され、北側の一辺がU字状に窪み、四隅に立石を配し、結界を張るところも共通する。墳丘と渡り土手で繋ぎ、出島の上に蓋、家等の形象埴輪を置き、王の居館を埴輪によって再現するところは、松阪市宝塚１号墳の埴輪配列にも類似する。これらの島、出島も常世の世界を表現したと考えられ、津堂城山古墳→巣山古墳→宝塚１号墳へ写し取られた可能性がある。巣山古墳の出島に配された形象埴輪は、外堤から臨場感をもって眺められることから、亡き王の永遠の住まいを埴輪で表現し、人々に見せる意味もあったと考えられる。

表4-2　出島状遺構一覧

古墳名	所在地	島状遺構			備　　考	家	蓋	囲	柵	盾	船	鳥	備　考
		幅	長	高									
津堂城山古墳	藤井寺市津堂	17	17	1.5	北側にU字の窪み							3	
巣山古墳	広陵町三吉	16	12	1.5	西側に突出部	7	7	4	10	4		3	
宝塚1号墳	松阪市宝塚町	18	16	1.6	渡り土手	3＋	○	3	5		2	3	土製品
五色塚古墳	神戸市垂水区	20	20	1.5	前方部側面								
		15.5	8	1.5	前方部　堤　北東部								
赤土山古墳	天理市櫟本町				造出しの南に突出部	11+		○					

また、出島の西側の州浜や瓢箪島の造形は、苑池遺構を想像させる。朝鮮半島では『三国史記』「百済本紀」辰斯王七年（391）に王宮の近くに池を穿ち、島山を造り、奇禽を養うことが記されている。4世紀末の百済には、王宮に苑池を設け、鳥を飼っていたのである。『記・紀』にも鳥を飼う記事があり、垂仁記・垂仁紀には「鳥取部」・「鳥養部」を定めたとし、雄略紀にも「養鳥人」を軽村、磐余村に置き、「鳥官」「鳥養部」が見える。仁徳記・仁徳紀の「雁産」記事は大王周辺における雁の飼育・産卵・育雛の技術・文化が成立したことを示すという解釈がある(5)。調査事例はないが、古墳時代の王宮に近接して島が浮かぶ池が穿たれ、そこに飼育された水鳥が泳ぐ苑池が存在するのかもしれない。巣山古墳の出島に付属する突出部や州浜、瓢箪島のような連接円形石積み等の造形は、常世の首長のために墳丘に備え付けられた苑池を表現した可能性も残されている。

註１　出島状遺構現地説明会１の際に、賀来孝代氏よりご教示を賜った。

註２　青柳泰介・木本誠二・奥田尚・福田さよ子・金原正明・松井章・中川正人・今津節生・小栗明彦・和田萃2003『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所報告　第74集

註３　滝斎2001「「水の祭祀場を表わした埴輪」についての覚書」『史跡心音山古墳発掘調査概要報告書』八尾市教育委員会

古墳時代に入って弥生時代の集落が解体し新たな再編の時期に，農業共同体的結合を基盤として首長　権が確立し、治水工事の縮小版とでもいうべき導水施設によって得られた浄水で共同体の紐帯を確認しあう祭祀と推測されている。

註４　渡瀬昌忠2004「日本古代の島と水鳥－巣山古墳と記紀の雁産卵－」萬葉　第186号

註５　註４に同じ

参考文献

今尾文昭2003「カミよる水のまつり－「導水」の埴輪と王の治水－」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館図録第60冊　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

２．準構造船

前方部北東隅から周濠北東隅まで周濠を斜めに横断する0502トレンチ、周濠北東隅の葺石裾付近から多くの木製品が出土した。柱材、板材とともに準構造船と考えられる部材が出土している。竪板（クスノキ）は約2.1m、幅約78cm、下部の厚さ約25cm、上部厚さ約５cmで側面に突起が付き、表面には円文様を中心に直弧文が描かれる。基部は船底の丸木船を跨ぐように「ハ」字状に加工され、根元が太く湾曲するのに対して先端は薄く平らに仕上げる。裏の両側縁には溝があり、中程にずれがあることから舷側板が二段に当っていたと考えられる。八尾市久宝寺遺跡から出土した準構造船の竪板と基本的構造が同じであり、直弧文を画する帯表現は大阪市長原高廻り二号墳出土の船形埴輪の竪板表現に酷似する。舷側板（スギ）は長さ約3.7m、幅45cm、厚さ５cmで端部が反り上がる。上端には三箇所の切り込みがあり、下端にも長方形の小孔が並び、一個の孔には桜の皮や木片が残り、背面の痕跡から５cm程の角材と繋いでいたことが推測される。表面には円文様と帯文様が彫刻され、円文様は方形区画の中に表現している。中央の円文様以外は帯文様が上に描かれ重複文様となり、赤色顔料が塗られた痕跡が認められる。このほかに、舷側板と考えられる三角形材（クスノキ）がある。長さ約1.8m、幅38cm、厚さは５cmで一端は細くなり枘となっている。表面には円文様と帯文様があり、舷側板と関係のあることが判る。

図4-30　準構造船復元

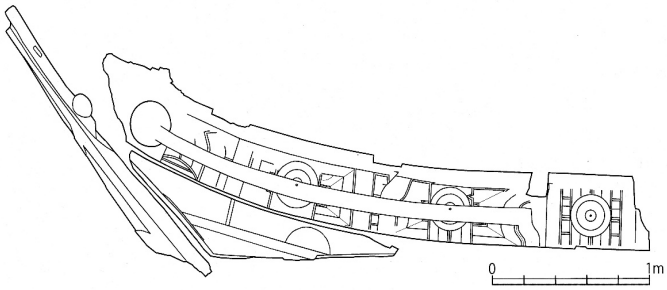

図4-31　準構造船側面文様

図4-32　竪板

丸木船の上に竪板が斜め外方に取り付けられ、竪板裏の溝に舷側板（スギ）の反り上がった端部が嵌め込まれ、三角形の舷側板は舷側板（スギ）の下段に竪板と丸木船を繋ぐように使われたと考えられる。舷側板（スギ）の文様構成から左右対称であった考えると準構造船の全長は８ｍを超えるものと推定される。

『隋書』倭国伝「死者は棺槨に納める、親しい来客は屍の側で歌舞し、妻子兄弟は白布で服を作る。貴人の場合、三年間は外で殯し、庶人は日を占って埋葬する。葬儀に及ぶと、屍を船上に置き、陸地にこれを牽引する、あるいは小さな御輿を以て行なう。」という記事から準構造船は葬送のための喪船と考えられ、遺骸を殯宮から埋葬地まで運ぶ野辺送りの儀式に使われた後、解体され周濠の北東隅に埋められたと推測される。

図4-33　舷側板

第４節　馬見古墳群の築造背景

森浩一氏は、馬見丘陵の大半が律令制下の葛下郡に属することから、馬見古墳群の被葬者を大王家の外戚として活躍した葛城氏とした[(1)]。白石太一郎氏は、巣山・新木山・築山・川合大塚山古墳という全長200m大のほぼ同形・同大の前方後円墳がそれぞれの古墳群の核となりながら周辺の古墳群を形成することから、北・中・南の古墳群が累世的な古墳群の形成を行う政治集団で、それぞれ独立しており、輪番的に首長権を握るような政治体制を想定している[(2)]。

和田萃氏は、式内社や地名から古代の葛城の本貫地は御所市の室宮山古墳周辺から葛城市忍海付近まであるとし、馬見古墳群は一氏族の奥津城ではなく、大王家の一派が形成したとする[(3)]。

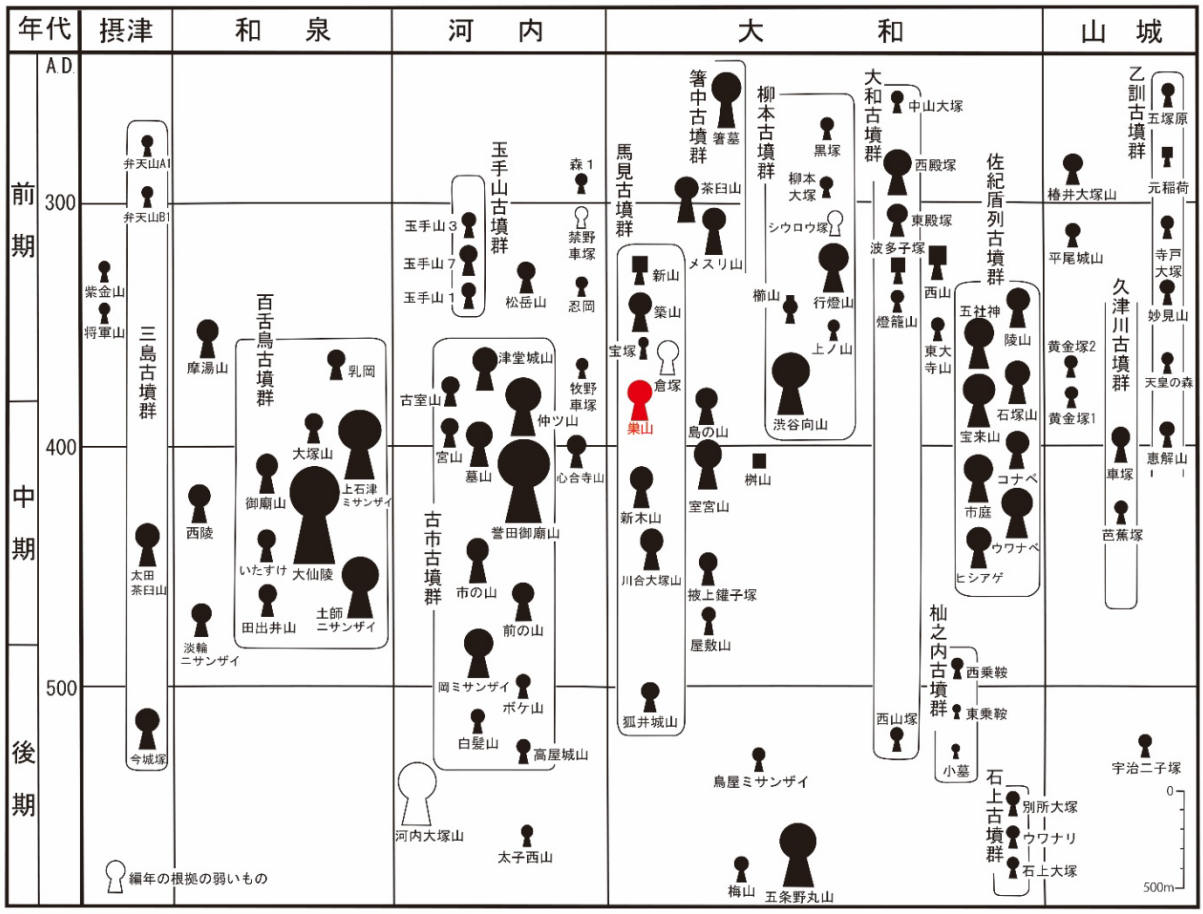

図4-34　白石太一郎による巨大古墳の編年（松木武彦改編）（巣山古墳を赤で着色）
［出典　松木武彦2025『古墳時代の歴史』講談社現代新書］

これに対して、門脇禎二氏、塚口義信氏は、葛城氏には本来二系統あり、北葛城には葦田宿禰系葛城氏が、南葛城には玉田宿禰系葛城氏が本拠を構えたことを葦田、片岡および玉手、円などの地名から考証し、北葛城に盤踞した葦田宿禰系葛城氏は、玉田宿禰系葛城氏が滅んでからも隠然たる勢力を持っていたと考えた[(4)]。

藤田和尊氏は、古墳時代前期において大和東南部・北部の大王家の勢力が、鏡を配布する際に頭部集中型の鏡副葬配置の因習を伝え、大和の南西部に本拠を置く勢力が、頭足分離型の鏡副葬配置の因習を伝えたとし、全国にその影響を及ぼした勢力は馬見古墳群を形成する集団であり、文献上は葛城氏以外考えられないとした。『記・紀』に記された武内宿禰の記事は古墳時代前期に馬見古墳群に葬られたプレ葛城氏の首長の事績を象徴する人物像であるとする[(5)]。

馬見丘陵に巨大な前方後円墳が出現するのは、佐紀から河内に大王の墓域が移動する時期であり、それは『記・紀』に描かれた武内宿禰の活躍記事と符号する。塚口氏は、佐紀周辺から河内へ大王墓の墓域が移動するきっかけが香坂王・押熊王の反乱であり、応神は息長氏・和爾氏など淀川、木津川流域から近畿北部の勢力を背景とする佐紀の王統と袂を分かち、大和川流域に拠点をもつ葛城・物部勢力と結び、新たな王権中枢構造を再編成したと説く[(6)]。

その背景には東アジアの情勢の変化が語られている。朝鮮半島では4世紀になると西晋王朝の混乱と五胡の蜂起に乗じて高句麗が勢力を増し、楽浪郡と帯方郡を滅ぼす。従来、ヤマト政権の後盾となってきた西晋が滅亡し、中国との交流が途絶えたことにより、自国生産のもの、朝鮮半島南部に関わるものが古墳に副葬されるようになる。佐紀地域に大王墓が築かれる４世紀後半にな

ると高句麗の南下政策のなか、『日本書紀』『三国史記』には倭国が朝鮮半島に侵攻したり、百済や新羅に入貢を求める記事が多くなる。沖ノ島祭祀が開始されるのもこの時期で、鉄素材の入手や鉄器生産をはじめとする先端技術の確保と半島南部の掌握が目的であったと説明する(7)。

『日本書紀』神功62年には、新羅が朝貢しなかったので襲津彦を使わして討伐するという記事があり、同条の分註に引く「百済記」の沙至比跪と同一人物と考えられている。玉田宿禰・葦田宿禰の父にあたる葛城氏の始祖で実在性が高い人物とされている(8)。その墓が室宮山古墳である可能性を白石太一郎氏が既に説かれている(9)。室宮山古墳は中期前葉に南葛城地域に出現する全長238mの前方後円墳であり、1998年の台風被害の後、舟形陶質土器が出土し、この説を補強している(10)。また、室宮山古墳、巨勢山古墳群の西部、金剛山麓の緩斜面には南郷遺跡群が広がる。５～６世紀の住居跡や金属、ガラス工房跡が発見され、南郷大東遺跡からは導水施設、韓式土器が検出され、極楽寺ヒビキ遺跡からは５世紀前半の石敷き護岸を持つ濠で囲まれた大型建物が見つかっている。『日本書紀』神功摂政５年、葛城襲津彦が新羅に行き草羅城を攻め、捕虜を桑原・佐糜・高宮・忍海に住まわせたという記事を裏付けるような発掘調査が行なわれている。

しかし、南葛城地域では15×20mの長方形墳である鴨都波１号墳、前方後円墳である山本山古墳が古墳時代前期に築かれるが、有力な古墳とは認められない。やはり室宮山古墳に繋がる系譜は馬見古墳群に求められる。丘陵内部で最初に築かれる新山古墳から出土した帯金具、別所城山２号墳の札甲は朝鮮半島や大陸色の強い副葬品である。また、新山古墳の三角縁獣文帯三神三獣鏡は仿製三角縁神獣鏡の原鏡とみられ、新山古墳・佐味田宝塚古墳には大量の仿製三角縁神獣鏡が副葬され、馬見勢力がこの鏡の製作・配布者であるという主張もある(11)。

新山古墳、佐味田宝塚古墳に引き続いて築かれる巣山古墳は三角縁神獣鏡の大量副葬は認められないが墳丘規模を倍増させ、周濠・外堤を備えて現われる。津堂城山古墳と同型同大と考えられ、出島状遺構も渡り土手を除けば非常によく似た構造をとる。また、出島の上面に敷き詰められた白石は各地から集められたもので、この中には越前付近から運ばれたとみられる正硅岩が含まれ、武内宿禰が応神をつれて越前角鹿で禊ぎを行う記事と符合する。さらに、渡来人を使って百済池を掘ったという記事は、先進地域であった朝鮮半島の技術者集団を積極的に招いて土木事業を行った事を示し、墳丘の大型化にも深く係わると予想される(12)。一方、出島に据え置かれた蓋形埴輪の肋木や盾形埴輪の直弧文は佐紀陵山古墳・渋谷向山古墳の形象埴輪を写し取った可能性があり、大和の保守的な埴輪造りの伝統が残されている。まさに佐紀と河内、両勢力の特色を内包する巣山古墳には、塚口氏の説く王統の再編成に深く係わった人物像が浮上する。

朝鮮半島や大陸との対外交渉に主導的役割を果たし、王統の再編に深く関与した一族が馬見丘陵に巨大古墳を築いたと考えられ、築山古墳・巣山古墳・新木山古墳等の大型前方後円墳の規模が伯仲し、近接した時期に築かれるのは、一族の首長権を輪番的に継承したという白石太一郎氏の論に帰結する。この地域の複数の首長の事績が武内宿禰の名でまとめられ、伝承されて『記・紀』に伝説的人物として記録されたものと考えられる。

『日本書紀』の武内宿禰の記述は、年代はともかくも、やはり藤田氏が主張するように古墳時代前期から中期前葉までに馬見丘陵に葬られたプレ葛城氏の首長たちの活躍を伝えたものと考えられる。しかもその本質は複数系統がまとまった北葛城地域を基盤とする首長連合であったと予想され、彼らが佐紀の王統・河内の王統と深く係わり、巨大古墳を築いたと考えられる。しかし、古墳時代中期後半になると玉田宿禰系の凋落とともに、馬見丘陵の中央群・南群の墳丘規模も縮

小し、その基盤も大王家勢力により蚕食されるものと考えられる。

註１　森浩一1955「古代文化に現われた地域社会－畿内－」『日本考古学講座5』河出書房
註２　白石太一郎・前園実知雄1974「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊　奈良県立橿原考古学研究所
註３　和田　萃1979「紀路と曽我川－建内宿祢後裔同族系譜の成立基盤－」『古代の地方史』第3巻　朝倉書店
註４　門脇禎二1984『葛城と古代国家』教育社　塚口義信1984「葛城県と蘇我氏」『続日本紀研究』第231・232号
註５　藤田和尊1997「葛城氏と馬見古墳群」『歴史読本　日本古代史　王権の最前線』新人物往来社
註６　塚口義信1993『大和王権の謎をとく』学生社
註７　寺沢薫2000『政権誕生』日本の歴史第2巻　講談社
註８　井上光貞1965「帝紀からみた葛城氏」『日本古代国家の形成』岩波書店
註９　白石太一郎1973「大型古墳と群集古墳」『考古学論攷』第2冊　橿原考古学研究所紀要
註10　藤田和尊・木許守1999「台風七号被害による室宮山古墳出土遺物」『御所市文化財調査報告書』第24集　御所市教育委員会
註11　藤田和尊1994「奈良県の前期古墳の編年と鏡」『倭人と鏡』その2、第36回埋蔵文化財研究会
註12　青柳泰介2003「導水施設考－奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐって－」『古代学研究』第160号

参考文献

鈴木裕明2002「政権交代－古墳時代前期後半のヤマト－」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館図録第58冊　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館